

112. <知恵の出し処?>

10年以上前、PMR（プロジェクトマネジャー）として幾つかの下水道施設の設計・建設業務に関わったことがあります。技術開発や維持管理畑を歩いてきて初めての設計・建設分野で、しかも新体制の試行錯誤の混乱の中でベテランと同じ仕事量をこなさなければなりません。当時は、問題が生じる度に時間を取られてやるせない思いでしたが、今から思えば面白い出来事も幾つかありました。

ある現場では、自治体の意向で、処理場用地が海沿いの埋立地から丘陵地帯の傾斜地に変更になっていました。平地が少ない地域で、“埋立地を処理場で使うなど勿体ない”というのが理由で、埋立地には中継ポンプ場を造り、標高数十メートルをポンプ圧送して処理し、隣接する沢に放流するという計画に変更されていました。既に造成工事に取り掛かろうとしていた段階で、盛土部分の擁壁をどうするかが課題になっていました。山を削って谷を埋め立てて造成する計画ですが、高低差が大きく法面に必要な勾配を取ろうとすると用地面積が不足し、処理法そのものを見直さなければならない状況でした。結局は、擁壁をピアノ線で内側に引っ張って支える当時の新工法を採用することで、用地面積を確保しましたが、ピアノ線を敷設した箇所には建屋が立てられず、レイアウトも大幅に変更することになりました。その後の話では、造成費も当初見積もりより大幅に高いものになり、自治体の評判も余りよくなかったようです。

こんな事例もありました。処理場用地を町役場の目と鼻の先の埋立地に決めていましたが、近隣の住民から強い反対運動が起きていました。住民集会に同席させて頂きましたが、心配されるような臭気の問題は生じないこと、景観も下水処理施設であることが分からないように配慮することなどの技術的な具体的提案をすることで、何とか理解して頂けたようです。後で聞いた話では、住民の理解は得られたものの、予想外の軟弱地盤で施工段階でも苦労が多かったようです。

他の現場でも多くの難題がありましたが、何とか知恵を絞って事業を停滞させずに済ませられたと思います。当時知恵を絞った現場が今どうなっているか？今まで見に行く機会がなかったので、退職後の楽しみにしています。

<戸田技術開発分室 川口 幸男>

※ J S 技術開発情報メール No. 126 号(2012/5/15)に掲載